

都道府県別賞一等

父を知らない僕と、支え合う家族

富山県 高岡市立高岡西部中学校 二年生

森垣 虹惺

僕が二歳半の時、僕の父が亡くなりました。その当時の記憶はもうろくなくて父が居ない生活が普通でした。僕に当時の記憶がないように、当時一歳半の弟もそれは一緒だったと思います。

今回、この生命保険の大切さの作文を書こうかと話した時に、母から「生命保険って何のためにあるか知ってる？」「一度調べてみるといいかもね」と言われましたが、正直よくわからないし全然興味わかないし、調べてもな、なんて思っていました。

なかなか書けない僕に、母が父のことについてこの機会に話をしてくれました。父が突然亡くなる前は、普通に生活も出来ていたし、万が一のことを深く考えていなかったそうです。それでも、結婚して僕が産まれる時に、父は保険に加入したそうです。それから一家の大黒柱に万が一のことや、病気やケガで働けなくなることなど、何かあった時に家族が困らないようにと少しずつ保険料を支払っていたそうです。その万が一がまさか自分に訪れるなんて……。急に父を亡くし、幼い僕たちを抱えながら母は不安でいっぱいだったそうです。精神的なことはもちろん、金銭的な部分もその不安の一部だったそうです。保険金が支払われることで僕たちが生活出来たことを母は話してくれました。贅沢な生活は出来ないけれど何不自由なく生活出来ていたと思います。

僕はこの話を聞いて、保険金は僕たち家族が生活をするために大切な必要な資金となり、僕たちが困らないようにしてくれるものだと思いました。

生命保険は、自分が亡くなった後に残された家族へのお金の保障だけでなく、突然の事故や病気などの考えもしなかった出来事への備えとしても大切な役割があるのだと思いました。父が僕たちを守るために、何かを準備してくれていたんだと気づき僕たちのことを心から思ってくれていたんだと、心の中で感じる事が出来た瞬間でした。

父が残してくれたものは、お金だけではありません。一緒に過ごした時間は短かったけれど、母が話してくれるたくさん思い出の中に父はちゃんと生きています。人付き合いが得意だったこと、よく笑う人だったこと、僕と弟のことをすごく愛してくれていたこと。

どれも、僕の心の中で大切なものになっています。時々、『もし今も父が生きていたら、どんな話をしたんだろう』とか、『一緒にキャッチボールを

第63回中学生作文コンクール

したり、旅行に行ったりしたのかな』と想像することがあります。

記憶として残っているわけではないけれど母の言葉を通して伝わってくる父の姿は、まるで今もそばにるように感じられます。一緒に過ごした時間がどれだけ短くても、その思いや存在は、今の僕にとって大きな支えになっています。

この作文を書くことで、保険の大切さを知ると同時に、父がどれだけ僕たち家族のことを思ってくれていたかを改めて感じる事が出来ました。そして、命の重みや、日々の暮らしのありがたさ、大切な人を守ることの意味についても深く考えるきっかけになりました。

父が残してくれたのは、保険という形のあるものだけでなく、家族を思い、未来を信じて生きる姿勢でした。その思いは、今も僕の中で生きていて、これからの人生を歩むための道しるべになっていると感じます。

そして、僕もいつか大きくなって家族を持つ時には、大切な家族を守るためにその想いを引き継いで強く生きていきたいと思っています。